

馬誌

雑話部

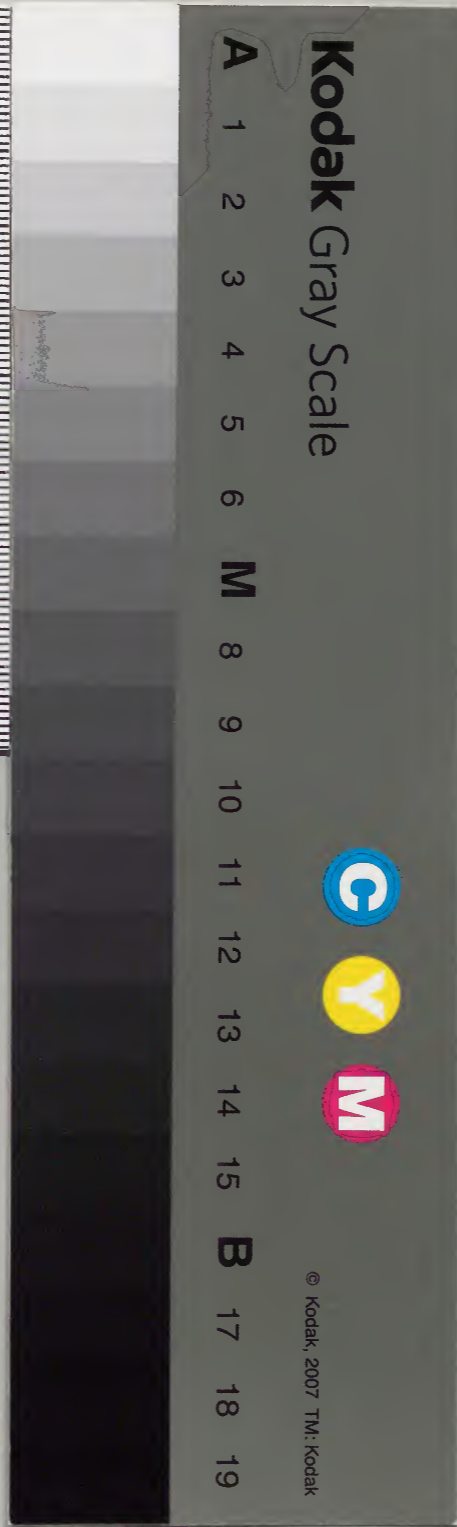
五十九

和	書	門			
一	七	三	九	五	
六	二	四	〇		
冊	架	函	號	類	

庫	文	閣	內		
五	一	七	三	九	五
函	二	六	二		
架	冊	號	類		

武備兵法

內閣文庫	
番號	和 17395
冊數	62 (60)
函號	154455





雜話部

馬誌卷之五十九目錄

淺草文庫



雑話部

馬誌卷之五十九



馬誌卷之五十九

雑話部

一 台徳公の普請の巡見のときと亀田大隅も高
 綱を台何とて石垣の度と崩るとの事あり
 亀田畏りて中上州に我等鳩の背の十文字
 とてて備ふるあり一度も崩らずすましく
 以ていも石垣は非情の物にて少く仕るべきなり
 此をなくゆと申上る故て普請上り少相成し

ハ骨折りて馬を下りて鹿毛駁あり
大隅者ハ玉井大炊頭利勝の家来早川
弥五右衛門也向て早川十けるハ
公方様より西馬拜領仕の趣小二毛の馬を
領仕の外見如何と存し早川の馬ハ如何
なり少くも若くは早川に替へ成されし
と訴訟いふれハ早川其段大炊頭へ達
しられハ尤至極ありとて外ハ馬を引替へ
されるとも云ふ

掃聚雜談

一 伊豆守信幸

台徳院様薨逝の時分ハ麻布の別荘小
ありて普請等あり河中島へ帰城ありて
ハ法探相撲あり興行あり又
大猷院様薨去の時分ハ俄ハ白金の屋敷を
調へ其普請小とて究竟の足輕千百人奉
侍の侍十四五騎を呼寄いふ事も
かぬ中に有られし河中島十萬石の田
少くも達者ある小荷駄百疋を急ぐもせいかも

采之輕く舟させて江戸まで舟送らせ給も馬
の勞れぬやう一日小五里ばかりの道積り
少くも寄らる江戸へ来れらる百姓の取持
少くも秘蔵する馬を産末おはいうくを友
と假厩を建立しやすめ置ゆめいと世上落
着の松子を見て帰されける程も馬子とも
に中舟板橋よりい浦和邊にて駄賃を取
て道のちやゆめやうい三十日餘り迄
て松代へ帰されけるといふ甚深意ある事

續武家閑談

一 或時

吉宗公千住筋津成りて還御のとき俄小馬
馬召させらるる不意召させられ小供の
面々の馬少附て駈けりけり中々二三所ハ續く
者もありたり十所とハ系る者ハなくハ是拂
の面々も大小何れ人も留兼ふるをかりあり
公ハソレん小供方小接いふく馬を早めさ
せしる馬に歩行の何とて追附中事のある

下さや殊小馬の名人あり乗らせ給ふ南
部栗毛より六十餘りの名馬あり誰一人
續ついでて来る人あるべきと公も思召あり
あり是も慰みのみ山河す時依ての進
退人をたれし清賢ある賢慮とや申す
時忽ち供の數人の中より書院番三好
監物小十人山田左十郎の徒鈴木三五郎此三
人の少しも馬をりす千住日慶寺の門
前より當日の本丸中の門銅門の内

風呂屋まで供すへさりさまありされハ
三好監物ハ大手前酒井雅樂政経番前小
て跡へ下りたり山田左十郎ハ乗橋際にて
倒れ一人鈴木三五郎もり風呂屋口まで
馬の側小放れす供上たり風呂屋口へ
老中を始め諸役人の側名乗の危む向ひ
供中へ奥へ入せ給ふ初中後馬廻り
一寸も退す供せし徒の姓名を尋ねあり
これハ赤井圖書組の徒鈴木三五郎と申上たり

則ち翌日右の面々を清城へ召させしめ

時服式 書院者 三好監物

同 十人 山田左十郎

唐花押紋服 ウ徒士 鈴木三五郎
白銀三枚

右ハ昨日還御の節の乗馬の御供と相勤りし
付の褒美とて下りし金れり昔焼火の間に
みて若年寄允侍彦黒田豊前守中一渡

されりて是よりして鈴木三五郎をい

ま韋駄天と異名を付て呼らるるとあり 近代公實 巖秘録

一 戸田左門及横州尾崎に出入りし馬百疋を買

りて尾崎かき兵庫までを里々に預け置此

間にて常々駄賃取り用向のしるは返し

中みにも中付りし銀り主悦び申し

聞見集下同

一 戸田左門及尾崎に出入りし尾張大納言横
有馬の内湯治ありし左門及伏見まで送り

に西登りしめて西内名の馬ハ是より名護屋へ
西返ト称するへ何社ありとも馬借中へ
と西中につきて西供の危悦いみかく名護屋
へ馬を返りし中なる有馬への見廻の西使者小
我等系りつるまゝ尾崎にて往中うすと見
中比大納言横川萬の茶屋あて西一献進上ふ
されし西約束を西中上の馬五十疋より同積の
新らりし馬具又ハ口取の中間衣類羽織前
かけまて同ト如くの漆あてにて鞍ハ黒塗並後

銀紋鍔ハ象眼あり障泥森山志りく濃
浅黄のつらな細みを新——くひつる梨子
地の鞍絨毛の障泥一疋も是あくひし
一 姫路より千二百石より百石以上の知行元所
一 持の馬を相の馬場にて毎年はかり一日小
十三疋よりつらな遊らされし家老中先の
馬の面より西慰み小西目小かけしきより預
い上役持の馬の海は以後出——中比あり百石
百五十石取の分假名を扱小西かくせ西居間小かけ

られ置馬所持の服中上ゆへに殊の外に満悦
の自身少く名小點を以て付何そいされ以て飼
料是と下され然る上八百石以上残りす所
持仕山 長山公行實

一 阿波國の守護蜂須賀家政入道蓬庵の家
中にて馬定ハ貴賤を撰りす馬する事ハ
くれとありしも是を背く輩何る小おいてハ
銀を枚の過急を然くトト付る是ふより
て家中の侍勵んで馬を持人多くとありさ

- 一 戦場ふて下馬これありといふ事急なる所
まてハ下りす鎧をくりたるすそのありかや
の場の不禮ハ權道あり 軍用心得之記
- 一 馬上にて馬持事馬の耳二つの間小持ハさふ
り但し何とて物射る人の持中ういふにも
然るハ 射御遺抄
- 一 馬の上少て考なる事志りくいの下りとも方

語傳集

- 一 結合せて弓の本弭をうけ末をうつとせり引たハ
め膝を以て大中を押し張へ張へ張へ張へ 安齋漫筆
- 一 馬上少て弓持てハ鼻をかむハ弦を張と
- 一 一人の肩小押當て張へ張へ張へ弓を持と
- 一 必す替弦を持へさふり 驛騶全書下同
- 一 弓持て馬上少て両手の入らハ弓と尻輪少て
- 一 弦を後へあすハ
- 一 古の武士ハ馬小乗ハ必す替をもさ弓持あり
常に何方へ行とも斯の如くありされハ舊

記少弓杖つとて馬に乗るさまは馬上の弓の持
中あり又貴人小逢て下馬して番とぬく
禮あり古ハ弓持して馬に乗をハ人見えて笑
しとあり 貞丈雜記

- 一 或時馬上ハ雲張とハ事あると張見よと
ハ宮原古外射ハの七分大海とハ弓と義倫
ハ送らる予ハ弓張んとするハ半時をうりハ
間ハたれとも馬動さ其上非力少て張る事
所ハす義倫見えて笑少て曰く予も若さ時

此弓ハ張れきりしときも依て乗たる馬左口
あるかたも左の鏝をうけ馬より下りて
張れハ何の手間も入らざりしありきて元の
めく鏝をまつし小山廻りの手綱を乗しふ
しり弓を納るふ手綱小持添ても乗るなり
又義倫教て曰く跡輪へ弓をうけて弦を鞍の
下へ交けて乗れしふ教のめくせしふハ心易
く乗れたるありし又弓を射見よしふ六分
むくりの力もこれありしや馬上少く心易く

射られしときも矢尺ハ常より式すをくり
も詰りしあり夫よりいふ志けん馬のれて
むら足をさせしゆ幸ひ弓を射て駈る馬を留
る事あり傳來の通り前足の間に弓の握
りの中すみと見て筋違に差込めハ片足ハ
肉片足ハ外ハ成ゆ馬走る事あるハすし
留りしあり

義覺覺書

一 馬上の敵を弓を射し胸板を令し射し
ハ鉄砲少く歩し馬の下腹を令し歩し

歩立の敵を鉄砲少て歩るときハ股の付根を令
小歩へし弓のしきさハ曹と射ふと知致すへ
さなり 軍法義葉集

一 馬上にて筒持中よりハ上帯小挟み何少ても栓を
指へし 軍用心得之記

一 馬上少て弓鎗鉄砲を納る事 まつ弓を鞍の
後輪小掛け弦を布へしきさ鎗ハ右鐙小石
突と付足の太指少て挟み上を鞍小結付へし或
ハ鎗を右の股小かいと三尺小拭少て具足の上帯

一 小結と弓少て同然あり鉄砲ハ始より帯挟
ある小筒を持て其まゝ帯小挟むへし結と吟味
あるへしとて馬上の太刀大身の鎗好まざる

事あり 軍法義葉集

一 弓鉄砲と馬上少て納めやうの事 但し弓ハ
半弓ありまつ鎗を納め弓を左小こハせ少て
納め矢ハ指物小添て置きて鉄砲ハ鞍の後輪小
小筒を矢籠のぬく小しき付るなり 又腕拔
と長く付て首へ引廻し 射るもよしとあり

一 馬上少く鉄砲を放つハ馬の息を清て我息を
 一 つ少く丸まらめて人馬一息ふくく放つ人言
 別くの息あてハ中々當らぬものあり 鏝と少く
 筋違ハ強くくみ孫を張すハ眼を張ちめて
 放つあり 武道勇術集

一 或るとき義偏長道具ともてとり種田流二間
 一尺の鏝石突と鏝の内足の親指少挟み鏝の
 柄を肩あけけ臂少く挟み乗あり心易くハ持

種々ものあり 義覚覺書

一 馬上少く鏝を立て持やり右の方小力革の膝
 より通し鏝のやふいむの中あ立て持あり

軍用心得之記

一 鏝立中りの事 鏝をさしす少く石突を押
 へて手綱の露を右の方小く少くさく夫少く鏝
 を入てちめて持し但し立るなり 翁物語下同
 一 外鏝小掛たる鏝踏中りの事小指少く鏝を押
 へて大指少く踏やくに足少くさくして痛

むありし人計りて敵をいひていふことあり

一人込のとき道具持中り腕へ石付を入大指小
て挟み固むるあり 軍法義葉集

一合戦のとき馬上して槍合する小敵を我馬
の右の方へ付るやうにしてよきあり 兎角敵

の馬を突うよきあり 我馬向より突くとき
の先少ても石突少ても向の腕を押へるに敵の

馬我右へはくるためそれ小勝ありとさあり
あり 軍用心得之記

一槍の先秘傳の事 槍持て蒐る時ハ右の腰よ
槍の柄と付も綱を持添徳先ハ馬の頭の中程
にあてて持進み目付ハ敵の右の拳小目と付て
蒐るあり 武鑑輯畧

一馬土の槍ハ元分突出しく引元の早き心得尤
あり 馬思はるる方へけ切る事 是あるゆへ
引取遅くしつてハ槍小放る事あり 馬頭槍
先を以て敵を左の方へ巻込中り小乗廻り互小
馬上ありハ目付ハおもて照つほと心掛へし馬と

突こも第一なり、然れども敵の其向き小ゆる
一馬上の槍ハ少く當ても手放さること多し
然るより腕ぬきを左の手の内ハ仕掛るな
り、則ち小手の内仕組をたるもすし
要馬秘極集

一馬上少く敵と槍と合する時の心持何り、真向胸
板をつく時ハ自然にたすすし、鞍をさす事
あるものあり、其向と突ハ悪し、腰を突と思
て突へ、敵を此見返りて突へ、さあり、人小
あ、らすとも必ず馬少、たさつるものあり、

一己持用集
竹中百箇條

一馬上少く先をす、事何り、此ととも一旦少、
さし、合はとあれ、足ふみ自由、小あ、さるゆ
へ、小度、の働、さ、あるなり、馬のつ、首
と、た、少、く、歩、く、最、馬、と、突、と、ハ、驚、く、ゆ、小
馬、小、た、ま、さ、す、馬、も、目、こ、と、あり、心得、
一己持用集
一馬上少く敵と槍と合する時、突既、少、突、落、す、ともあ、
て、下、馬、す、へ、け、ら、す、ま、つ、馬、を、乗、廻、こ、し、
二、三、も、二、三、も、突、て、後、馬、より、下、て、首、を、丸、く、

あし首を取ると小太刀を以て首の根に突く

剣切竹中百箇條 軍法義葉集

一 馬上少くは合戦の一番少くも一番に成さるるあり

車り立滄合するると一番遠くよりあり軍用心得之記 下同

一 野合の合戦惣て馬上少くは戦はさる事あり

ホリも立ての勝負仕る事 肝要あり

一 昔一前田利家卿の物語なるに城を攻め

しむるに早く馬より下りしに必す

息をいれものあり 功者ハ城際少く乗す

ものあり 但しふけ田々沼の雨ハ格別ありと

の意に少事 利家語諾

一 歩行武者より馬を突くと遠くても長刀小

て心無るものありハ歩行立し向ふとさハ兼て

其心を志す馬を向馬少く直しくをへて惣て

一 馬ハ向疾とハさのみ痛ます 横疵と痛むもの

ありハ縦い馬を突も一切もあつりとも向馬

ハあさむのあり 乗かけ勝負をすへて又

馬向より敵に長刀を持て突くとハ馬を

色もろすすものあり乗名の繕はるの頭引
添て突出すものあり乗名は少しも驚
す敵の繕をいさすものあり 武道勇術集

一 軍場少て兵具を納る事 弓矢砲ハ左右前
後の障泥の指緒を引とき結紐小結いしを
て此緒ハ差込置り 但しカ革の下より差
込あり 繕薙刀ハ右の方の後の四緒をけ
りねの志くみたる繕うけあり 其方の障泥
の裾小石突の入り手を拵へ何れも兼てより付

一 並是ハ納めて置り けり けり けり けり けり
あり 是ハ下立とけり けり けり けり けり
けり 槍薙刀ハ直さしてあり 或ハ槍薙刀を
横さすハあすハ鞆の組ちり けり 石突とけり
けり 別ち右の服ハ帯に繕うけを挟み置其繕
けり けり 横さす けり けり 要馬秘極集下同

一 馬上少て兵具を納め或ハ急用のとけり けり けり
す 諸具とてそれ けり けり けり けり けり
又ハ鞆口をけり 左右のカ革の間ハ指ハ野指あり

上の方へ置いて澄をさみまうりぬれはたとい何れ
おもひこしつよとも落ることあり長刀等ハ石
突とカ革の首へ差之澄へつけまひすり少て
押へ前輪のもとへ押しあて膝にて押しささ
み糸へ下或ハ灯笼おとみて乗ハ馬口を前
輪の内へ筋違ひに差之其先ふくけて乗へ
何れも馬上にお座する内にお落るといふことなき
ものあり

一 馬上少て刀を抜とさこころを綱と切ことあり

初より柄を越して置へさあり 軍法義葉集

一 馬上少て刀抜中より綱と左にお持下て右の糸を

上より抜へ綱自身と切まじりためあり

又左の糸綱持たる糸左へくまつと削ても抜ふ

軍用心得之記
軍法義葉集

一 馬上少て刀を抜事綱の内より抜へ

す手と切又ハ綱をささるものあり左の糸を

さし越へおれを抜へ靴にお細むるさハ靴

を指少てかく指のまじりすさすく

一已持用集
竹中百箇條

一馬上少て刀拔とも不緒。鞘おひひみみを腰少結
 へハ鞘落ちす。馬上少てハ刀と鞘おひひにくま
 ものあり逆ひ小え止し我胸小刀のむ収を
 當てす陣刀等寸延たるハ甚あり、
 と心得へし左ひ小え持甲あり虎虎職雜談
 一立齋ねへき岐中止し鎧の上少て二尺三寸と
 成る刀ハ馬上少てぬけ中さるし中を
 薄世皆陣刀ハ寸合短く小仕ゆし及ひ

ゆと中うれい意小足達對馬ハ三尺一寸の
 刀を馬上少てぬき道雪松馬の前少て騎
 馬三騎步行武者六人を一取小切せ是ハ
 いくぬくや心と静めて一度ぬけすハ中取
 してもぬきたるうしもぬほと急
 あるときハ服差と抜へし無して馬上少てハ
 柄を逆手に取て抜きし一馬おある氣
 差いなく延たるもぬけし小服差もる
 上少て抜歩ハせぬしと仰られるなり

一 馬上少て刀を抜持てかくと入馳れハ馬けハ飛
しき必ず馬の首を切ものあり心得三河之物語

一 馬上少て刀をぬき持て行しき刀を右のふ

持右の肩少歩かけて行竹中百箇條
一已持用集

一 馬上少て太刀をきふ少弓をりりてハ三つの角

少一前より後ふかけたる綱の上少右臂を
かけ向くくりて業をす小馬つういふぬ
故あり弓の時の時。つかけの緒を右の指さけ

左小柄を持添へてもよろし馬のハ左を綱
の間ふ入て柄をとる弓の時のハ左臂を左膝に
あててつかハぶつくりとする。馬も同意が
り尤うちをなれてきいてハ膝へ戻り来る
事あり武馬心鏡下同

一 弓を太刀少拭て引落す事ありも弓を拭
られたりハ鞍と弓を少さうりて太刀とぬきて
弦と切るこぶハるいませうりハ早く又取付の
緒と切事あり兼て心得を

一 馬上武者と勝負する時ハ馬を切り射るをうり
るも収落馬する時を討へしとて戦士の心付
へさふと語り申されりあり 三河之物語

一 馬上少て人と切へさ心得の事 右の者を切へさ
時ハ左の鏝小心を付へし左の方の者を切へさ
時ハ右の控小心を付へさあり 但小心を付て

踏事あり 軍用心得之記
軍法義葉集

一 馬上少て好まざる道具の事 長太刀長身の襷
悪し無用の事 竹中百箇條

一 太刀馬。寸尺の事 新田左中將義貞并小楠多
門彦清正成としく太刀馬の寸尺太方定め記
し並れざるも其後文明のころ和田ヲ歸ると
いへる文武の仁。太平記を評して書る中小
馬の丈ハ三寸強て三寸五分までハ馬込川渡
其外乗下り少も自由ありんためあり 歳ハ七
八歳カハ一尺二寸又ハ一尺三寸まで太刀ハ二尺
二三寸の者尤稀るへし 但し男の長小よりか
んといへり六具少て馬小乗襷を持人斯の如

一 さらハ昔よりヤ置一事に逼て苦一々ぬ
ハ武具。先出で苦一々ぬハ一番衆。後れて苦一
々ぬハ後殿あり一々傳一々 語傳集

一 板倉周防守重宗ハ京都の所司代少名を
揚たり本より一万事に心ある人あり或一々
牧野攝津守。防州の宅小余ある防州出逢て
談話の序小貴殿馬上少て照若のさり中り
を知られたるうと問るに知らずと答へけれ
ハわろき武士ふといわれたり恥一々事

一 小思ひうるうと後小牧野氏物語あり 碎玉話

一 歩立の敵を馬上少て討と一息小衆倒す

一 一さあり一系遠の敵ハ馬をされ。手綱をされ。
臂を切れ。腰をされとふるあり 軍法義葉集

一 楠正成或と一思地少語て曰く敵を切小ま
武者を切す一馬をされ。馬を切す一
手綱をされ。カからありと一引馬。癖馬少衆
ことあり。快く健ふる。教馬ハ策を加へ衆一

一 鏡鑑抄

一 古人の曰く敵ふりし矢玉稠き付少は鞍の上。
 鐙の方へ乗下りし手負いしるさま少く楯を用ひ
 敵を伺ふものあり世に物見鞍と云ふ武鑑輯畧
 一 馬上楯さましくありしと云ふもいさめ皮をよく
 けりしめ胡麻の油を百返も二百返も引て乾らす
 一 一さそくありし恰好ハ玉の好みの如くありて
 持一 大筒ハ知らす二つ玉ふとにてハ薬三か
 込位ハ歩援る事ハ記あり 武道勇術集
 一 首を取馬の上少く納めやうの事 一 左。二。右。三。

左とりよまゝ耳を突通し物付小付るをハ丸
 付ふつくるともいふ左と云付。右と跡お付ともい
 四緒は一尺二寸ある一方締て針二寸をうり小
 て又付て平針のめくし付置お付の緒とよ
 事あり 武鑑輯畧

一 大将の首ハ持付小付るう勢いよし 平士の首ハ
 捕付小付る何れも忍の緒少く付る素首を
 細繩を口より腮へ通し付る此小繩を二尺を
 かりふして四方を巻いて付るもあり厚巻の

時ハ四方ノ小揚巻の紐あり 騎士用本

...

...

...

...

...

...

...

...

...

